

北海道 稲作地帯に於ける肉牛飼育を訪ねて

(滝川市北滝の川地区) I

雪印種苗(株)中央研究農場長
常務取締役

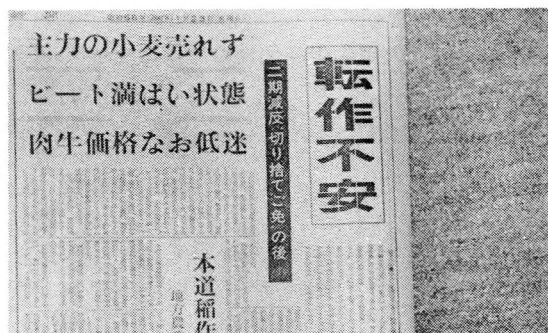
三浦 梧 楼

大幅な稲転の打開策(対応作)の一つとして、肉用牛生産を“地域補完体制”の形で導入し、所得向上の実現に努力している滝川市北滝の川地区の肉牛飼育の状況を探ってみました。

今年は第二期水田利用再編の初年目ですが、前年の冷害をも配慮したとはいえ北海道の増加面積は約1.5万haで、これを含めた北海道の水田の転作率は約50%と大幅なものとなり、今後転作作物として肉用牛導入の地域、農家の増加も予測されますので、参考になればと以下報告します。(1月23日訪問)

偶々前日の22日北海道は第二期初年目の転作目標面積の増加分1万4,980haの支庁別配分を決定した直後でもあって、転作不安の高まる最中に肉牛生産の転作農家(地域)の実態を探ることも意義あることであろうと……雪の降りしきる出発前の早朝地元新聞を開いてみますと、大きく目にはいつてきたのが“転作不安”、“二期切捨てご免”の後

- 主力の小麦売れず
- ビート満ぱいの状態
- 肉牛価格なお低迷



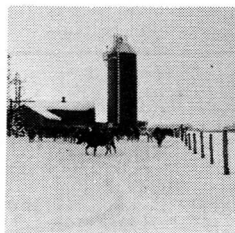
転作不安？

であった。転作の有力部門と目されている肉用牛の生産実態を尋ねようとする時だけに鼻を挫かれた気がし、また当日は夜来の豪雪降りやまず、車の先きの見透しも悪く不安と、先きの暗さが暗示されているような、やりきれない気持ちを押えながら滝川へと向った。

先ず市農協の畜産課の山岸勝さんから地域の概況を伺った。

1) 地域の概況

滝川市の農業は稲作中核で水田4,120ha、畑753ha、樹園地296haを農家戸数1,300戸余で耕作経営を行っている北海道でも豊かな農業地帯で



春の待遠しい
雪国の牛群

目 次	
□北海道サイレージ用F ₁ トウモロコシ ニューデント	表①
□北海道稲作地帯に於ける肉牛飼育を訪ねて	三浦梧楼 1
□北海道F ₁ トウモロコシの新品種紹介	橋爪 健 5
□府県におけるサイレージ用トウモロコシ	
栽培の注意点	細田尚次 8
■ローズグラスの上手な栽培技術と乾草調製	大山一夫 13
□F ₁ トウモロコシの肥料障害	表③

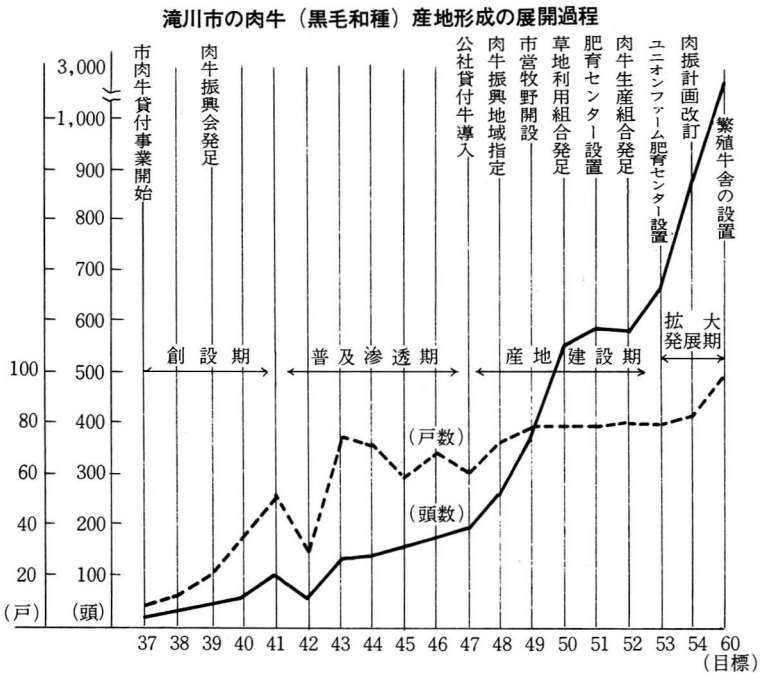
ありましたが、肉用牛（黒毛和種）は稲作経営の地力維持（農業の機械化に伴って無家畜農家が多くなったため）と農業所得の向上をねらいとして約20年前の昭和47年（米の1割減反の翌々年）**肉用牛生産振興地域**の指定をうけ、本州先進地、主として島根、広島県等より優良繁殖牛の導入を行った。更に昭和49年、丸加山市営牧場の開設に伴い外延拡大が可能になったと同時に、夏期は完全放牧（夏山）で耕種部門との労力競合も解消され急速な増頭を示すようになってきました。

繁殖牛の増頭によって次の段階として昭和51～52年に***肉用牛生産団地育成事業**を導入し、所謂肥育センター（2棟で約1,300㎡（約390坪）200～250頭収容）を設置、同時に肉牛生産組合、

草地利用組合の設置等によって地域一貫生産体系が確立され、更に昨昭和55年には繁殖部門の強化をねらって****中核的繁殖施設**（所謂繁殖センター）5組合（10戸）の導入（繁殖牛繋養数1組合25～30頭前後）が行われ、一部素牛出荷もありますが、主流は地域内完結飼育で所謂“滝川牛”の出荷もみられるようになってきたのが現況です。この態勢で肉用牛事業推進を図ってゆくならば決して遠くはない時期に“滝川牛”更には“空知牛”としての産地形成が大きく期待のもてる拡大発展期を迎えたものといえましょう。

滝川市に於ける肉用牛の産地形成の展開経過を示しますと図の通りです。

2) 生産のしくみ（体制）



肉用牛生産の体制

(分担)	(地域内完結飼育)			(育成、肥育)
	(繁殖、育成)	(育成)	(育成)	
場所	農家内	牧場	肥育センター	
管 理	中核的繁殖経営農家5戸 他に5～6頭飼育農家約50戸	市（管理人2名）	農協（肉牛生産組合） （管理人2名）	
時 期	冬 期	夏 期	冬 期	
区 分	繁殖基礎牛とメス子牛	全頭放牧（子づれ） 牧場で分べんのものもあり （成年換算で470頭収容）	肥育用もと牛全頭 （220～250頭収容）	

繁殖と肥育の一貫経営を地域補完体制下で行っており、繁殖は徹底した「夏山冬里」方式の合理的方法をとり、肥育については、もと牛は生れた年の秋10月末の市営牧場からの下牧と同時に肥育センターに収容され、それぞれの月齢に応じた飼育、肥育を行い概ね月齢30カ月前後（現在は30～35カ月齢）で出荷します。つまり飼育場所（ポイント）は農家、牧場、そして肥育センターの3カ所となり、それぞれの機能について整理してみますと前表の通りになります。

3) 中核的繁殖農家（香西秀雄氏）

山岸さんのご案内で繁殖農家の一例として香西秀雄さんの経営を尋ねてみました。

イ) 経営の概況は

○水田 9.0 ha 中

米 作 7.0 ha 10 a 当たり収量 8.5～9.5 俵

転作小麦 2.0 ha 10 a 当たり収量 6.5～8.0 俵

（今年の転作率は37%前後？）

○肉用牛 ① 自家繁殖 35 頭

┌ 繁殖基礎牛 17 頭

└ 牝子牛 7 頭

└ 育成牛（繁殖後継牛）11 頭

② 他に肥育センターに預托

（雄牛）15 頭

③ 合計 50 頭

○労働力 夫婦 2 人

ロ) 肉用牛導入の動機と、拡大過程

香西さんは導入の動機と、今日までの経過について感慨をこめて話してくれましたが、紙面の都合上これを要約しますと、従来の水田単作地帯に馬が消え農業機械の普及に伴って地力問題の心配がでて豚の導入を計画した。この豚舎は後継者育

成資金（無利子）50 万円の融資によった（山岸氏附言）。その後、昭和 40 年に市の貸付牛制度を利用して黒毛和種 1 頭を導入し、労働力の関係もあって、昭和 48 年までは時には子牛の販売をしながら 1～2 頭の堆厩肥生産を主とした米作に肉牛のコブつきのような形で進んできました。

ハ) 稲転と公共牧場の開設を機に拡大

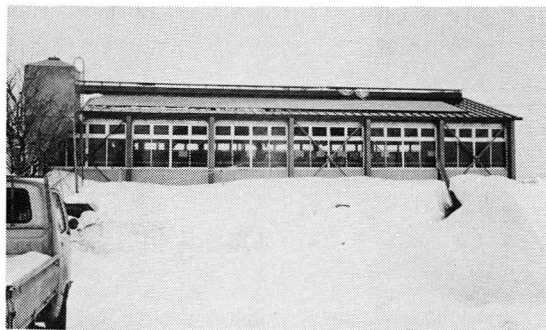
昭和 48 年、49 年のオイルショックと同時に農業界では稲転も大きく取上げられてきたときに、香西さんは細々ではありますが、約 10 年間の黒毛飼育の体験を生かして転作作目に黒毛飼育と麦作を選択しましたが、この肉用牛選択の背景には、夏期間の耕種作業の忙しい時期に放牧飼育のできる市営丸加山牧場の開設利用による省力飼育が可能になったことも大きな力となっているようです。

更に導入増加についても丁度タイミングよく市（農協）が北海道貸付牛制度を導入していたので割合スムーズに拡大ができた（山岸氏談）ということでした。つまり公共牧場の開設と一般情勢の稲転強化が米作地帯での肉用牛部門拡大のハズミとなったようです。

ニ) 確固たる基盤のできた肉用牛部門

香西さんの肉用牛部門は前記経営概要で記した通り、導入開始から 15 年という年数は経過しておりますが、本格的にとり組んだのはここ数年で、既に総頭数で 50 頭を数えるに至り、更に香西さんを訪ねて平坦の水田のド真中に明るい繁殖牛舎と附設の D、H 型の飼料貯蔵庫が目につきます。山岸さんによりますと、この施設は昭和 55 年（昨年）

「**肉用牛集約生産基地育成事業」の制度を利用したもので、繁殖牛舎は 1 棟 237.6 m² (72 坪) で繁殖基礎牛 25～30 頭収容、それに哺育または若齢



肉用牛集約生産基地育成事で設置の繁殖牛舎（72坪）



繁殖基礎牛30頭繁殖の明るい牛舎

(オス)、更に繁殖用もと牛も一部繋養できる給餌管理のしやすい対頭式の片屋根は透明のきわめて明るい充分採光を考えた牛舎で、香西さんは建てた時点で既に満度に近い牛が収容され、一方附設の飼料庫(237.6m²=72坪)には敷料を主とするモミガラと、石狩川堤外草地から収かくしたというチモシーの梱包乾草がウズ高く積まれ、経営基盤の確立されてきたことを充分示していました。(なおこの牛舎と飼料庫は制度事業の利用で50%補助によっています。)

ニ) 飼料確保と繁殖成績

香西さんもこの集団と同様、夏山冬里、方式に徹していますが、冬期の飼料確保は転換田によるものと予想して訪ねましたが、さにあらず、転作田は全部秋まき小麦を栽培しての穀実生産販売で麦稈だけを利用し、冬里(舎飼いの7カ月)で給与する乾牧草1頭当たり約2,500kg、総量で75tと推定されるものは石狩川の堤外草地50haから1番刈り(6月25日~7月20日の間)を主体として7戸協同で約2万梱を収かく、これを配分して給与を行っております。

また他のグループは市営牧場の採草地を利用しての乾草調製もあるようで、夏山への放牧といい、冬の乾草取得といい、現在までは何れも外延拡大で飼料確保のできる立地的な強味をもっています。

転作田には麦作奨励で秋小麦を作付けして、米作に近い生産を挙げつつありまして、資金回転のおそい肉牛部門を確実に拡大しつつけられたのもこの辺に一つの推進力があるように感じました。

冬里の舎飼い期間の給与飼料は繁殖基礎牛1日1頭当たり乾牧草(チモシー主体の稍刈おくれのもの)12kg前後と肉用牛基礎配合(TDN 67.5%, DCP 9%)1kg前後とビタミン剤少量の給与で、殆どの牛は夏山の自然交配で受胎して下牧するので繁殖の問題もないとのことでしたが、幼齢牛の発育が一寸物足りなさを感じました。しかしこのことについて山岸さんも香西さんも、この地帯ではオス、メスともに殆ど地元への素牛供給ですから骨格さえできておれば将来の心配はなく、「素牛で肥っているものには魅力を感じません」ということが強く印象づけられました。それは府県で多くは子牛、素牛を有利に販売する(9~10カ

月齢で)ためには見栄え(ミバエ)が必要で、そのためには夏の放牧時期でも子づれの牛は舎飼いして授乳期間を長め(6~7カ月)、放牧の運動量過重によって(親と同行するため)発育の減退がないようにとの飼い方が必要だということをしばしば見聞したからです。また最近のように枝肉量の大きいものが要求されるようになりますと、早熟、早肥の従来の飼育パターンから、先ず骨格や、胃袋づくりを先行した飼育方法に変えて大型の健康な個体養成が要求されてきているものと感じました。

ホ) 肉牛導入による他部門への影響

香西さんは前記した経営概況の他に6人共同で離農跡地または借地水田20haに小麦作を行っておりますが、従来の水田一辺倒の時に較べると機械化は進んでおりますが、忙しくなったと、特に天気を気にしながらの6月下旬から7月20日頃の1番牧草での乾草調製時期が重荷のようでした。しかしこれは今後の問題としてオール乾草がよいか、サイレージではどうか、(特に繁殖牛用としては適当)ということも検討課題で労力軽減の余地はありましょう。

労力負担の増大は経営が複合拡大されたわけですから当然でしょうが、問題は延時間の増大ではなく部門間に競合のないこと、つまり年間平均して合計の増加することは労働報酬を得るためには好ましいわけです。

香西さんの肉牛部門そのものは現在はまだ蓄積の段階が大部分ですが、これの導入による他部門への影響として耕種部門への堆厩肥供給による地力増進に着目されておりました、謙遜のうちに語ってくれたのは

○米作では近所の水田より収量は若干多い程度ですが米質がよいのでは?(昨年も精選機1回で検査に合格、地区では2~3回の精選でようやく合格した例が多かった)

○麦作 転換田に本格的に麦が入って3年経過し、連作障害(黄化萎縮病、立枯病等)が随所でみられますが、堆厩肥施用田にはこれがまだ発生していません。と。

(次回は放牧場、肥育センターの運営と、育成・肥育段階での課題等を報告します。)